

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

【氏名】二宮望

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院人間・環境学研究科

【研究題目】二〇世紀における政治的図像学の思想史

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、二〇世紀における歴史家・美術史家の言説を丹念に読み解くことで、その時代に前景化してきた「政治のイメージ化」の諸相を明らかにすることである。大衆化社会の出現、イメージ技術の普及、それと並行したマス・メディアの発達が社会に与えた影響に関してはこれまでも多くのことが語られてきた。しかし、本研究が特に強調するのは、政治的メッセージの発信―伝達―受容というコミュニケーション回路におけるイメージの重要性だけではなく、イメージをめぐる駆け引きそれ自体が政治的な出来事になったという、より本質的な地殻変動である。つまり、イメージはもはや議会なり、公共空間なりで起きた重大事を大衆のもとに届ける透明な発信手段であるにとどまらず、そこで「政治的なもの」が繰り上げられる舞台になったのである。注目すべきは、イメージというメディアにそもそも含まれていた政治性なのであり、そこに政治的図像学という学問領域が必要とされる所以がある。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

助成期間中は、とくに在外研究が必要な1) E. クリスと E.H. ゴンブリッチのカリカチュア研究、2) P.E. シュラムの権力表象研究、3) A. ヴァールブルクのマネモシュネ・アトラスプロジェクトに絞って研究をすすめる。

1) この研究については助成期間以前に一度学会発表を行っているが、その機会を通じて明らかになってきた研究上の問題点に対処するためにさらなる資料調査の必要が生まれた。その問題点とは、ゴンブリッチが一九三〇年代から執筆を続けていた未刊のカリカチュア論稿の草稿に関するものである。この草稿は、現在ロンドンのヴァールブルク研究所のアーカイヴに収められているが、そこでカリカチュアの美学的性格についてどのような記述をしているのかが、このイメージジャンルの政治的な作用を考える上で非常に重要になってくる。

2) シュラムの権力表象研究に関しても、助成決定後に暫定的な研究報告を学会で行っている。本研究では、一九二〇年代におけるドイツの熱狂的な中世受容と皇帝図像の崇拜という時代の空気とシュラムの中世研究の不可分な結びつきに焦点を当てている。オットー三世についてのシュラムの博士論文がそこで重要な手がかりになるため、その資料が収められているハイデルベルク大学図書館に出向いて調査する必要がある。

3) 「マネモシュネ・アトラス」プロジェクトとは、ヴァールブルクが黒い布の上に大量の複製写真をピンで留め、西洋のイメージの歴史を再編成したパネルの集成のことである。歴史を書き込むという行為が、これまで時代の勝者だけに許されてきた特権であるとするれば、自らの手で一から歴史を再構成しようとするヴァールブルクの試みは、長い間影に埋もれてきた時間の諸相をすくい上げるきわめて政治的な行いだといえるだろう。助成期間中は二〇二一年に開かれていた「マネモシュネ・アトラス」についての展覧会カタログの分析やダイアグラム論についての考察を深めることで研究をすすめていく。

## 【結論・考察】(400字程度)

上記(【研究の内容・方法】)の1), 2), 3)に沿って研究調査報告を行った後、あらためてプロジェクト全体の総括を記す。

1) クリスとゴンブリッチのカリカチュア研究に関しては、予定通り未刊資料の調査を二〇二二年七月にロン

ドンのウォーバーグで行うことができた。既刊資料からうかがい知ることのできなかったかれらの議論の成熟（とくに、出版メディアや美学的・心理学的議論）をたどることができた。これらの成果は、博士論文の該当章に取り込み発展させる予定である。

2) こちらに関しても、ハイデルベルク大学図書館での調査を行い、シュラムの博士論文を複写してることができた。テキストの分析は未だ十分に遂行できていないが、中世ドイツ皇帝に幻惑された歴史家の像をそこから取り出すことができるのではないかと想定している。

3) 助成期間以前であったが、「ムネモシュネ・アトラス」の展覧会には実際に足を運ぶことができ、長大なカタログも入手することができ、研究は順調に進められた。ドイツでの在外研究中にダイアグラム論の専門家から教えを受けられた点も大きな収穫であった。

結論：

感情にうったえかける政治的イメージの強力な力に着目した本研究プロジェクトは、そこからいかに距離を取るかという方図をめぐる問題に直面し、最終的にイメージによる「歴史（物語）」の再構成という一つの解決策にたどり着いた。別の言葉で言えば、イメージがもたらす「毒（人間を狂わせるかもしれない魅力と害悪）」は、それを忌避して社会から排除するのではなく、イメージのより良い（再）利用によって克服されるべきであるというのが本研究の結論である。二〇世紀の美術家・歴史家たちの実践の中には、そうした再利用の模範的・先駆的事例を見つけることができる。本研究は、インターネットやソーシャルメディアの浸透によって錯綜をきわめる現代に、イメージとどう向き合っていくべきかに関するひとつの指針を導き出すことができた。

（目安の分量を大幅に超えてしまい申し訳ありません。）